

阿賀野川

aganogawa E-toko dayori

えとこだより



ここにあるすべてを、
かけがえのない「宝もん」へ。

阿賀野川 千唐仁からの情景 (阿賀野市千唐仁) 撮影: 山口冬人氏 (JPS 日本写真家協会会員)

もくじ

- 2 特集1 「阿賀野川エコミュージアム」を目指す流域再生フォーラム
- 3 第1部 新潟水俣病の経験に
向き合い、乗り越えるために
- 4 第2部 まぼろしの阿賀の逸品の数々を、
これからの阿賀野川ブランドに活かす
- 6 連載コラム
- 7 ● 「阿賀の宝もん」から考える地球環境
- 8 特集2 平成23年度「ロバダン」レポート
インフォメーション

「阿賀野川エコミュージアム」を目指して

新潟水俣病に向き合い、乗り越える流域づくりの始まり

平成19年度から開始した「阿賀野川えとこだプロジェクト」(FM事業)は、「光と影」の視点に基づき、パネル巡回展や地域再発見講座、公害関連の環境学習プログラムづくりなど、新潟水俣病に向き合う地域再生の取組を進めてきました。そうした中、流域の方々からは、自らの暮らしとFM事業との接点が見えなくなるといった声も聞かれます。実は、この率直な意見は非常に印象深く、地域再生のあり方を一歩前に進めるきっかけをFM事業に与えてくれました。

その結果、新潟水俣病に向き合う取組だけでは足りず、それを乗り越えた後、全国に向けて発信できる様々な取組が必要と考えました。そこで、それらを流域各地の方々と協働して築いていく新たな営みを、平成23年度半ばからFM事業と並行して開始しました。

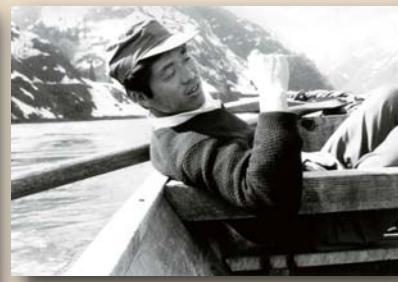
今号では、「阿賀野川エコミュージアム」と名づけられた、この新たな流域再生の動きについても、今年3月に開催されたフォーラムのレポートと併せてお伝えします。

映像作品

阿賀野川と共に生きてきた船頭さん

～写真で綴る五十島地区・元船頭さんの半生～

日本の近代化と公害の発生が表裏一体となった阿賀野川流域の歴史。その一面を昔の写真で綴った映像作品が完成しました！



かつて、阿賀野川の上流には県営の渡船場があった。船頭は渡し舟を毎日のように漕ぎ、多くの人々を岸から岸へと運び続けた。しかし、新潟水俣病の発生と時代の流れに翻弄された男性の人生…その光と影の記憶をどう未来へつなげるか。

〈ご覧になられた大学生の皆さんの感想〉

- 元・船頭さんの娘さんを思う気持ちに感動した。
- 泣きそうになりました。
- 今の時代を生きる人間としては、川と人との関わりが、ここまで大きかったとは思わなかった。昔の人の人生を視覚的に追体験する重要性がわかった。
- 元・船頭さんの半生を追うことで、他人からの差別や分かりづらい症状を気にするあまり、被害者だと周囲に言い出しにくくなる水俣病の怖さを学べた。



開催予告 今冬、阿賀野川下流域を題材にしたパネル巡回展を開催予定！

「阿賀野川えとこだプロジェクト」とは？

正式には「阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業」(通称FM事業)と言い、阿賀野川流域の各地域が今も続く新潟水俣病と向き合い、それを乗り越えるような「人と人の絆」や「人と自然の関係」を紡ぎ直すため、流域の住民・行政・民間団体が手を取り合い、「新しい地域づくり」を目指して始まったプロジェクトです。

阿賀野川えとこだ！憲章(事業理念)

私たちは新潟水俣病に学び教訓を伝承することで、負の遺産から新たな価値を創造していくことを目指します。阿賀野川流域の宝物を広く内外に発信しながら、公害により失われた人と人、人と自然、人と社会の絆をつむぎ直していきます。地域を愛する人が地域の未来をつくる「流域自治」の確立へ向けて行動します。(阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業推進委員会)

編集後記

第7号はいかがでしたでしょうか？
今回、本誌で初めてお披露目できた「阿賀野川エコミュージアム」。これとFM事業…2つのプロジェクトが同時進行中なので、実は目も回るような忙しさなのです。しかし、おかげさまで、流域に眠る数多くの「宝もん」を掘り起こしつつ、その過程で様々な方々と親交を深めさせていただき、フォーラムの開催へとこぎつけることができました。ご協力いただいた関係者の皆さん、様々なイベントへ参加された皆さんには、心から感謝申し上げます！
次回、第8号は、いよいよ阿賀野川下流域を舞台としたパネル巡回展を特集します。ご期待ください！

阿賀野川えとこだより 第7号
 発行:新潟県(※環境省補助事業) 発行日:2012年9月25日
 企画編集:阿賀野川えとこだプロジェクト(事務局/〒959-2221 阿賀野市保田 3866-1)
TEL.&FAX.0250-68-5424
aganogawa@niigata.email.ne.jp

「阿賀野川えとこだ！ブログ」
<http://www.aganogawa.info/>



リニューアルまであと一歩…。

特集1 阿賀野川エコミュージアムを目指す流域再生フォーラム

これまでの地域再生の取組「阿賀野川えとこだプロジェクト」(FM事業)に加え、平成23年度半ばから新たに始動した新プロジェクト「阿賀野川エコミュージアム」。この2つの流域再生プロジェクトの様々な事業成果を実際に体験して肌で感じ取っていただくため、平成23年度末にフォーラムを開催しました。

P2～P5カラー写真(※紙芝居写真除く)撮影:山口冬人氏(JPS日本写真家協会会員)



砂利運搬(昭和30年、旧水原・分田)撮影:村上孟氏/提供:村上直行氏



昭和電工株産瀬工場(出典:産瀬工場タイムス昭和29年新年号44号)



阿賀野川・最後の帆船(昭和25年、五泉・笹堀)撮影:木村清氏/提供:木村仁巳氏

本フォーラムは、平成24年3月25日(日)、五泉市咲花温泉の「佐取館」咲花きかせ堤河床にて開催しました。当日は、雨模様の天気にも関わらず、流域にお住まいの大勢の方々からご参加いただきました。

なぜ2つの流域再生なのか?

本フォーラムの目的は、公害問題が今も続く流域の地域再生に理解を深めていただくことで、すが当日はいつもの座学だけではなく、これまでの様々な事業成果を参加者の皆さんから直に体験していただく趣向も加えました。

このようにすることで、普段は気づかない阿賀野川流域の潜在的な力や課題を肌で感じ取ってもらい、現在、2つの異なる流域再生を進めている意義に思いを馳せていただければ...と考えたからです。

今回の特集では、こうした観点から、当日のフォーラムの様子などをレポートします。



第1部

新潟水俣病の経験に向き合い、乗り越えるために

紙芝居「新潟水俣病との出会い」



〈参加者の主な感想〉

- 風化していた水俣病を思い出した。子どもたちにも伝えていかねば。(60代・新潟)
- 視覚にも訴えてきて、最後まで興味を持てた。理解しやすかった。(50代・阿賀町)

阿賀野川えとこだプロジェクト × エコミュージアム 〈参加者の主な感想〉

- 地域の活性化にこの取組は不可欠。(70代・笹神)
- この取組を地域の活性化につなげて。(50代・新潟)
- タブーだった過去の出来事を公の場で話し合うことで多くのことが分かる。(50代)

2つの流域再生プロジェクト解説



「向き合う」だけでなく「乗り越える」

これまで、阿賀野川流域では、FM事業を通じて、新潟水俣病に向き合う様々な取組が展開されてきました。しかし、さらなる流域再生を目指すには、公害の経験を乗り越える独自の環境取組や地域づくりを全国に向けて発信して、公害の負のイメージをプラスに転化させるような阿賀野川ブランドの確立が必要とされます。

「阿賀野川エコミュージアム」始動

こうした趣旨に基づき、平成23年度半ばから、FM事業とは別に、新潟県「新しい公共」モデル事業の一環として、新プロジェクト「阿賀野川エコミュージアム」がスタートしました。本プロジェクトにおいては、五泉市の咲花温泉観光協会・阿賀野市・阿賀町・日本自然環境専門学校・阿賀のがわ環境学舎が協議会を結成し、運営に当たっています。

2つの取組を軸に真の流域再生を

今後は、この2つのプロジェクトを車の両輪のように前進させることで、全国に堂々と誇れる阿賀野川ブランドを育めるような流域再生をさらに加速させます。

2つのプロジェクトを流域再生の両輪にして――